

下笠師遺跡群

県営は楊整備事業中島地区笠師工区埋蔵文化財発掘報告書

1997・3

石川県立埋蔵文化財センター

下笠師遺跡群

県営は場整備事業中島地区笠師工区埋蔵文化財発掘報告書

1997・3

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1. 本書は平成4年度に実施した県営は楊整備事業中島地区笠師工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書で、石川県鹿島郡中島町下笠師地内に所在する、下笠師F遺跡、下笠師スノブ遺跡、下笠師E遺跡の報告を行っている。
2. 上記3遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課（現在は農地整備課）の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 現地調査および資料整理、報告書の刊行に係る費用は、一部文化庁から補助金を得た他は耕地整備課が負担した。なお、出土遺物の整理については鯖石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。
4. 現地調査の実施から報告書の刊行に至るまでは下記の関係機関の協力を得ている。
文化庁記念物課、石川県農林水産部耕地整備課、石川県七尾土地改良事務所、中島町教育委員会
5. 本書における挿図などの扱いは以下のとおりである。
 - (1) 挿図中に指示した方位は座標北である。また、土層断面図の水準線に付した数値は海拔高（単位m）である。
 - (2) 挿図の縮尺は図中に示した。
6. 調査によって得られた実測図、写真などの記録資料および出土遺物は、石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

本　文　目　次

第1章　序　章	1
第2章　調査の概要	3
第1節　発掘地区的概要	3
第2節　遺構と遺物	11
第3節　まとめ	20

報告書抄録

ふりがな	しもかさしいせきぐん						
書名	下笠師遺跡群						
副書名	県営は揚整備事業中島地区笠師工区埋蔵文化財発掘報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	中島 傑一						
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター						
所在地	石川県金沢市米泉町4丁目133番地						
TEL	0762-43-7692						
発行年月日	平成9年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經 ...	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
しもかさしい 下笠師 F遺跡	いしのかせぎんかしまぐん 石川県鹿島郡 なかこさましまもとさしらない 中島町下笠師地内	17403	33017	37° 136° 5' 51' 37° 45°	19920907～ 19921112	1,090	県営は揚整備事業 中島地区下笠師工区
しもかさしい 下笠師 スノブ遺跡	いしのかせぎんかしまぐん 石川県鹿島郡 なかこさましまもとさしらない 中島町下笠師地内		33021	37° 136° 5' 51' 33° 23°			
しもかさしい 下笠師 E遺跡	いしのかせぎんかしまぐん 石川県鹿島郡 なかこさましまもとさしらない 中島町下笠師地内		33018	37° 136° 5' 51' 30° 17°			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下笠師 F遺跡	散布地か 集落遺跡	中世		中世陶磁器	集落遺跡の縁辺部と推定される。		
下笠師 スノブ遺跡	散布地か 集落遺跡	中世		中世陶磁器	集落遺跡の縁辺部と推定される。		
下笠師 E遺跡	生産遺跡と 集落遺跡		溝跡、土坑	製塙土器、土師器、 須恵器、中世陶器、 木製品、漆器	古代の生産関係遺跡と中世の集 落遺跡の複合と推定される。		

第1章 序 章

本書に報告する下笠師E遺跡、下笠師F遺跡、下笠師Sノブ遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課・石川県七尾土地改良主管の県営は場整備事業中島地区に係るもので、同事業は農業経営の近代化と農村環境の改善をはかることを目的として行なわれ、水田区画の大型化および用水と排水路の分離と農道の整備などが具体的にはこれらにある。

石川県教育委員会文化課・県立埋蔵文化財センターでは、県営は楊整備事業に関する埋蔵文化財について事前の協議によっての試掘分布調査で、埋蔵文化財の有無および範囲確認を行うとともに、事業区域内に存在する埋蔵文化財に対して保護措置を講ずるよう関係機関と協議を進めてきた。それでも、やむを得ず埋蔵文化財の保護に影響を生ずる箇所については発掘調査を実施することで対応してきた。

平成4年度に工事を着手するということであったので、平成3年度の秋に分布調査を実施し、その結果について回答を行っている。それをもとに、関係機関と相互協議した結果、排水路部分等の深掘削により埋蔵文化財が破壊される部分は県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行うこと・水田面の工事に係る部分は切土盛土調整を行うことにより埋蔵文化財の保護をはかることなどが決定した。そして、平成4年9月11日より工事が先行されている下笠師Fより調査作業を着手し、次いでスノブ遺跡、E遺跡へと移動しつつ11月12日に約1,060m²を発掘して現地作業を終えている。

この構造の調査地は、七尾西湾（海）と対峙する標高200～300m代の山地丘陵が発達した笠原川によって形成された、河口部域からその縁辺沖積平地部にあたっていて、標高は1.7～3mとなっている。

遺跡（遺物）の分布調査の結果で示される様相としては、丘陵裾部（地区外で現集落立地）より派生的に分布する様相として捉えられており、従って3遺跡（地点）ともには場所に半月状ないし舌状に張り出す形状となっていて、全く沖積地上に立地した遺跡とはいきれない様相があった。



調査遺跡（アミキセ）と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

遺跡番号	枚番号	地図番号	名 称	所在 地	所在地道名	種 别	墓 状	立 地	時 代	出 土 品	備 考
33001	45	上川鶴文道路	中島町土川		散布地	田、山林・ 畠	丘陵地	鶴文	土器(中期)		
33002	45	田原谷内道路	中島町屋谷内		散布地	田	平地	鶴文	珠鋼鏡		
33003	45	土川道路	中島町土川		基盤	山林	丘陵斜面	中世	灯明皿	1974年、道路工事中に 発見。素焼文センター 発掘会。	
33004	45	豊田道路	中島町豊田		散布地	畠	丘陵・ 平地	鶴文	磨製石斧		
33005	45	豊田B道路	中島町豊田		散布地	田	平地	鶴文	土器		
33006	45	豊田C道路	中島町豊田		散布地	田	平地	不詳	土器		
33007	45	豊田D道路	中島町豊田		散布地	田	平地	不詳	土器		
33008	45	鶴成寺跡	中島町豊田	ボンジョウ寺山	寺地	山林	丘陵	不詳			
33009	45	豊田ホリバタケ道	中島町豊田	ホリバタケ	散布地	畠・山林	丘陵	鶴文・ 奈良	鶴文土器(中期), ・平安		
33010	45	豊田古墳	中島町豊田		古墳	山林	丘陵上	古墳			
33011	45	豊田町道路	中島町豊田町		散布地	山林	丘陵斜面	中世	珠鋼鏡		
33012	45	中笠原古墳	中島町笠原		散布地	田	平地	中世	五輪塔、珠鋼鏡	1991年、系地文セン ター調査。	
33013	45	笠原A道路	中島町下笠原		散布地	山林	丘陵上	中世			
33014	45	笠原B道路	中島町中笠原		散布地	平地	丘陵斜面	平安～中世	土師器、灰陶器、 地州鏡		
33015	45	笠原C道路	中島町中笠原		散布地	山林	丘陵斜面	奈良～平安	須恵器		
33016	45	笠原D道路	中島町上笠原		散布地	山林	丘陵斜面	中世	青銅鏡片		
33017	45	笠原F道路	中島町笠原		散布地	田・宅地	平地	中世	土師質土器、地州 鏡、越前鏡		
33018	45	笠原E道路	中島町笠原		散布地	田	平地	古墳・ 奈良	土師器、灰陶器、 ・中世		
33019	45	笠原道路	中島町笠原		古墳	山林	丘陵上	近世			
33020	45	二輪家跡	中島町下笠原		散布地	山林	丘陵上	近世			
33021	45	下笠原スノープ道路	中島町下笠原		散布地	田	平地	奈良～中世	土師器、灰陶器、 ・五輪塔 (人足寺墓地に移 転)、灰陶土器		
33022	45	佐原南側新幹線	中島町佐原		散布地	田	平地	古墳	新塗土器		
33023	45	笠原南側・ジャイ 製塩道路	中島町笠原		散布地	田	平地	古墳	新塗土器		
33024	1	45	河崎1号墳	中島町河崎		古墳	山林	丘陵	古墳	円墳(径16m、高3m)	
2	45	河崎2号墳	中島町河崎		古墳	山林	丘陵	古墳	円墳(径15m、高2m)		
3	45	河崎3号墳	中島町河崎		古墳	山林	丘陵	古墳	円墳(径8m、高1m)		
4	45	河崎4号墳	中島町河崎		古墳	山林	丘陵	古墳	円墳(径7m、高0.8m)		
5	45	河崎5号墳	中島町河崎		古墳	山林	丘陵	古墳	円墳(径10m、高0.5m)		
6	45	河崎5号墳	中島町河崎		古墳	山林	丘陵	古墳	円墳(径10m、高0.8m)		
7	45	河崎7号墳	中島町河崎		古墳	山林	丘陵	古墳	円墳(径8m、高0.5m)		
8	45	河崎8号墳	中島町河崎		古墳	山林	丘陵	古墳	円墳 (径7.5m、高0.5m)		
9	45	河崎9号墳	中島町河崎		古墳	山林	丘陵	古墳	円墳 (径15m、高1.3m)		
10	45	河崎10号墳	中島町河崎		古墳	山林	丘陵	古墳	円墳(径5m)		
33025	45	西谷内道路	中島町西谷内		散布地	田	台地 標高70m	鶴文中期	土器多數、打製石 器、磨製石斧、石 器多數	鶴文中期 土器多數、打製石 器、磨製石斧、石 器多數	
33026	45	河内A道路	中島町河内	宮の前	散布地	田	丘陵	鶴文	打製石器多數	鶴文20cm×20cm、 1970年、土地改良工事に より掘出。	
33027	45	河内B道路	中島町河内	シバヤ	散布地	道路・田	丘陵斜面	鶴文	打製石器	鶴文10m×10m、1970 年、土地改良工事で発 現。荒廃地。	
33028	45	河内C道路	中島町河内		散布地	道路・田	丘陵	鶴文	磨製石斧1個	現況不明、排水渠工事 中、黄土層と鉄鋸。	
33029	45	西谷内道路	中島町西谷内		城跡	原野	丘陵	宝町～安土	青銅鏡片、灰陶器 宝	城跡100m×100m、之 城にわたり水堀、空堀、 土壘の遺構が確認能 力。	
33030	45	横原山の古跡	中島町西谷内		城跡	山林	丘陵	宝町～安土		四方を谷で囲まれた孤 立峰。山頂部を空堀で 区切り、跡形状に土壘 を削除。	
33031	45	鳥越寺中古墓地	中島町鳥越		寺跡	山林・畠	丘陵斜面	中世	珠鋼鏡片、五輪塔、 板碑	珠鋼鏡片上面 旧日枝社社前用木牌	
33032	45	鳥越からこ谷道路	中島町鳥越	からこ谷	散布地	丘陵・山林	丘陵	鶴文	打製石斧上面		
33033	45	鳥越城の裏道路	中島町鳥越	ばばのくち	散布地	田	河岸段丘	鶴文	石器4個		
33034	45	鳥越城の裏人跡	中島町鳥越	城の裏	散布地	畠	丘陵斜面	鶴文	石器4個、磨製石 斧1個	東西100m、南北20m の山跡瓦礫地。	
33035	45	町屋跡	中島町鳥越・町 屋		城跡	山林	丘陵	中世		鶴文20m×20m、土 塼	

(石川県道路地図付地名表より抜粋)

第2章 調査の概要

第1節 発掘地区の概要

発掘調査は、前年度に実施された試掘調査結果に基づいて、は場整備工事が行なわれる東西方で約0.8km間に3地点（F・スノブ・E）に別かれ分布する、その分布範囲内に係わる用排水跡工事部分が対象となる。掘削幅2m×3地区合計で延長約500mの発掘作業となる。

下笠師F遺跡（地点） 側状に段々と屈折する水路の直線一条を各一区として計6区までを称名した（第2図）。調査区の層序は地点によって若干色調の強弱などがあるが、基本的には第1層～第7層（ここまで確認）まで同系列層としてそれぞれに対応が可能である。第1層は耕土・床土で、第2層の灰色粘質土より珠洲陶片1出土、第3層淡灰色粘土土、第4層暗灰色粘土上で製塙土器片出土、第5層淡灰青色砂層、第6層暗灰色砂層、第7層淡灰色砂層で死貝（簾）が含まれている。但し貝の含みを確認できたのは5・6区である。遺物の出土は小片のものが多い。既に周辺は耕土のすき取りと区画塗が出来上っている状態で、そのなかから明代青花白磁片を採集団化したので掲げておきたいが、調査区内ではどの層面が一般的にいう文化面となるか土層の点検からも痕跡が伺えない。強いてあげるとすれば、第4区東端部の第6層面で淡黒褐色土の入る浅いくぼみを1つ確認している。

下笠師スノブ遺跡（地点） スノブ地点においても1条ごとに各1区とする計8区がある（第5図）。発掘区は東西方に約200mの区間であり、層序的に統一のとれない状況をもっている。しかしながら、この調査地区においては、包含層的な黒褐色～黒灰色層と、その下に比較的しまりのある黄灰色系で厚く堆積したベースと想定できる面を認めることができた。

1・2区では第1層耕作土（床土含）、第2層灰褐色土、第3層暗灰色土、第4層黒褐色土で、その下が黄灰色土（ベース）となっている。

3区では、1・2区土層より耕土の下層で淡灰褐色粘質土が加わっている。近位置にあるが海側の下手にあたっていて堆積層が多くなったようである。第6層目が黄灰色弱粘性土（地山面）となり、第5層黒褐色粘質土中より珠洲カヌエ部片1点出土した。その他北側地点では板状材の杭列が東壁側で一部検出できたが、断割りを行ってみたが杭としかいいようがないものがある。

4区～8区は道路を挟んで3区の東側にあたる。4区は3区と連続的位置にあたるためか、基本的に同様の土層序といえるが、東（海）側にいくに従って第6層地山ベース土とした黄灰色土が獨立のある灰オリーブ色土に変わっていく（潤滑性強）。こうした状態は5区～8区にかけてさらに潤滑が増し、潤滑オリーブ色粘性土に変質した地山系列土地区となっている。

遺物については、4区第5層黒灰色強粘質土で中世陶片などと、6区第6層暗灰色強粘質土で珠洲片1点の出土がある。希薄ながら遺物は点点との出土があるが、造形について明らかではない。7・8区についても図化はしているがこれといって提示できるものはないので図示を省いた。

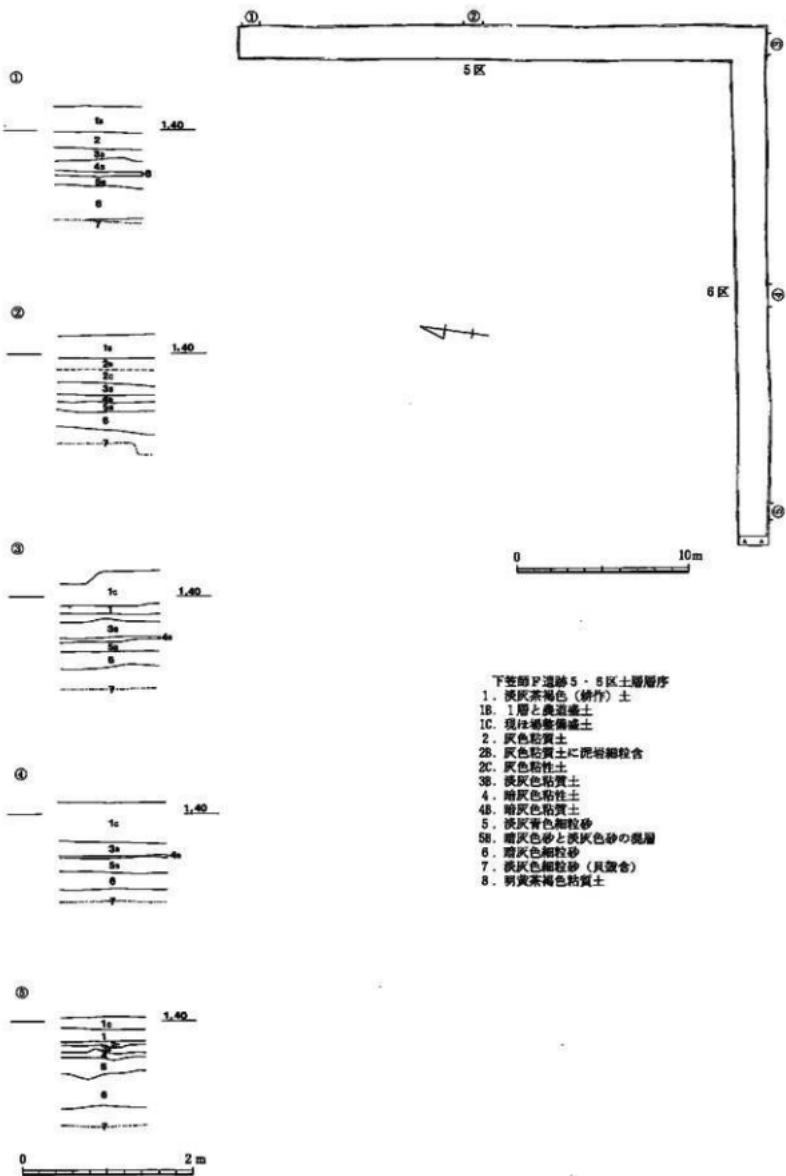
下笠師E遺跡（地点） E地区は今回の調査対象三地区のなかでは笠師川の上流側にあたっていることもあり、また、丘陵に接した地点でもあるため地盤も安定した調査区といえる。遺構検出面までは約40～50cmで、基本的層序としては第1層の耕土床土層以下第2層灰黄色粘質土、第3層淡灰色強粘質土、第4層暗灰褐色強粘質土、第5層が地山として淡灰色砂質土となっている。



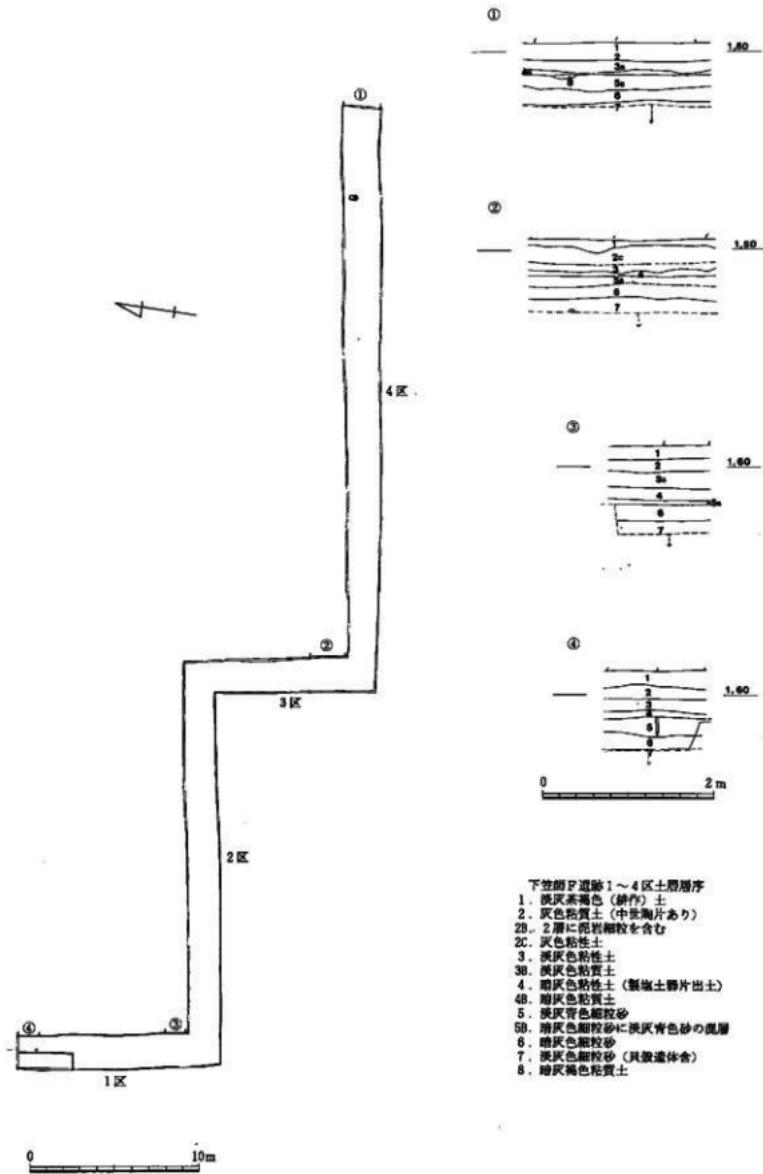
第1図 F地点採集遺物（S=1/3）



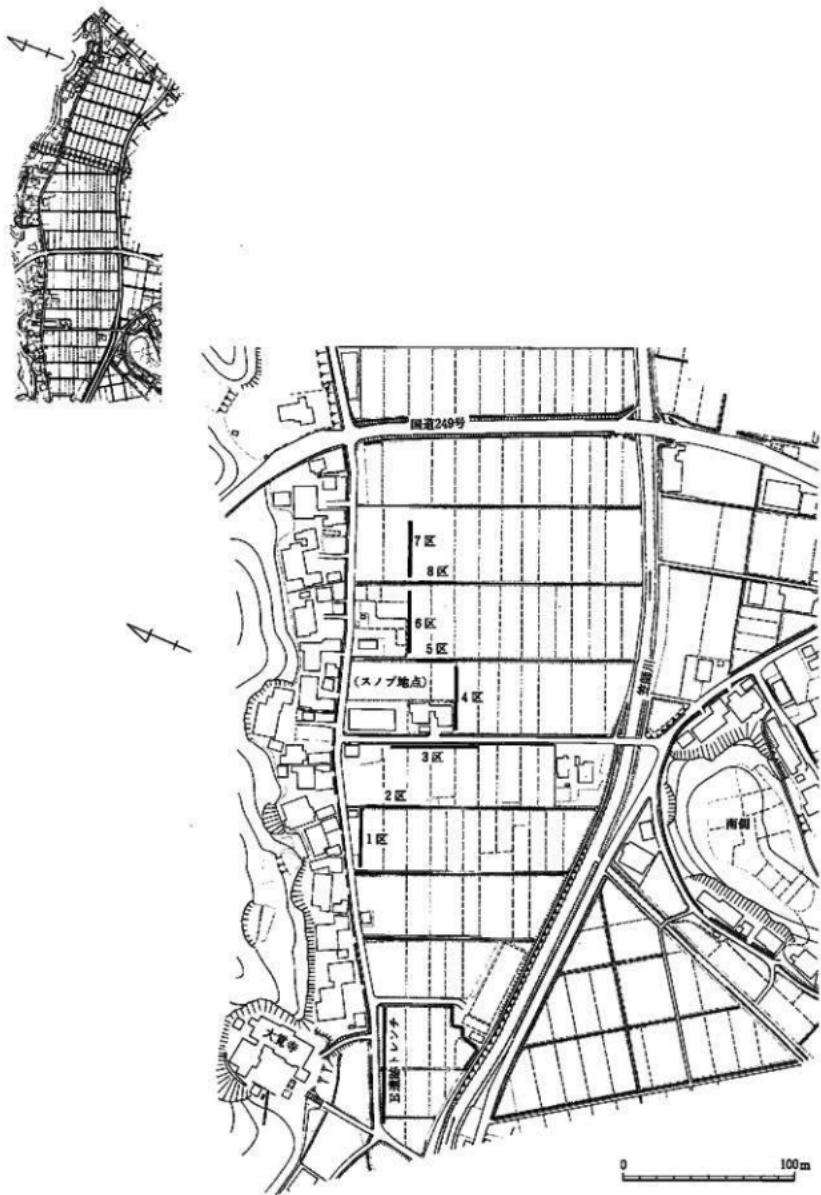
第2図 下笠師F遺跡発掘トレンチ（1～6区）位置図



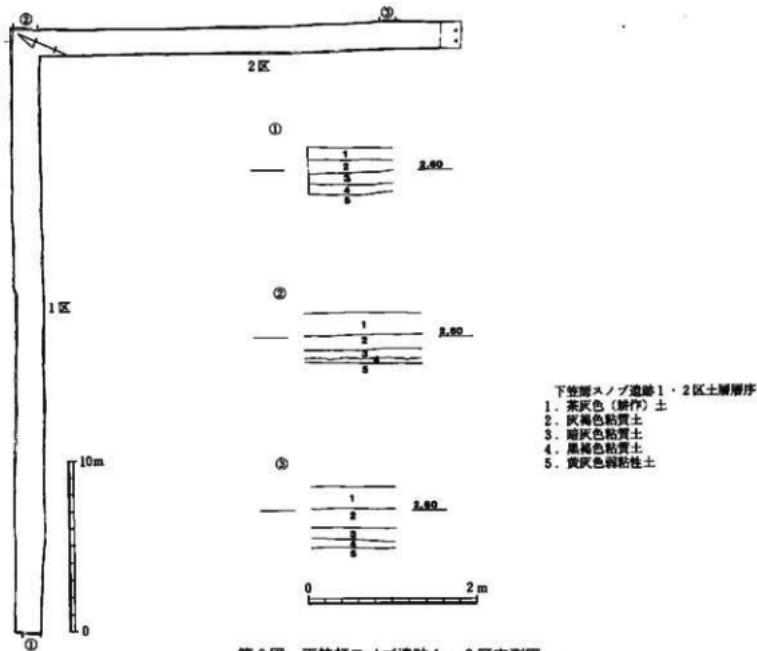
第3図 下笠師F遺跡5・6区実測図



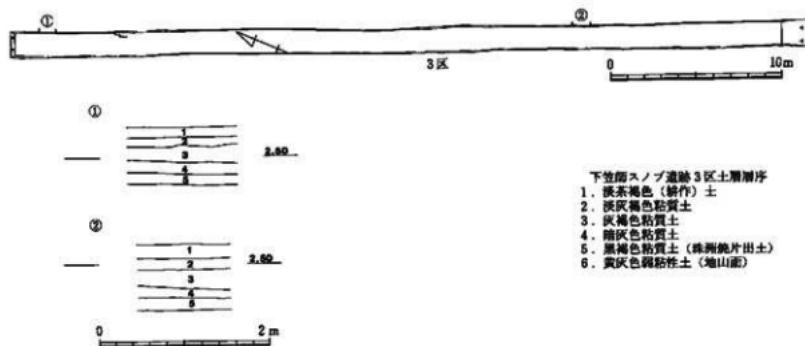
第4図 下笠ヶ原F遺跡1～4区実測図



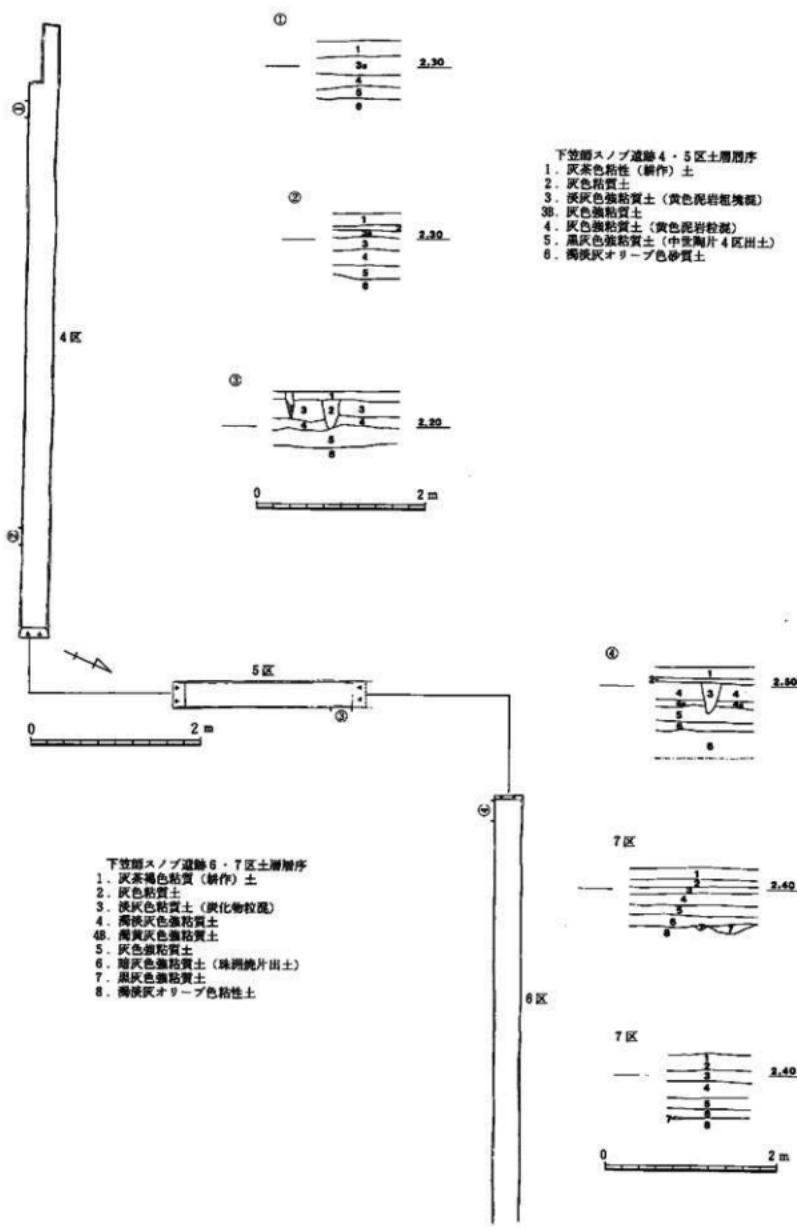
第5図 下笠師E遺跡・スノープ遺跡（1～8区）発掘トレンチの位置図



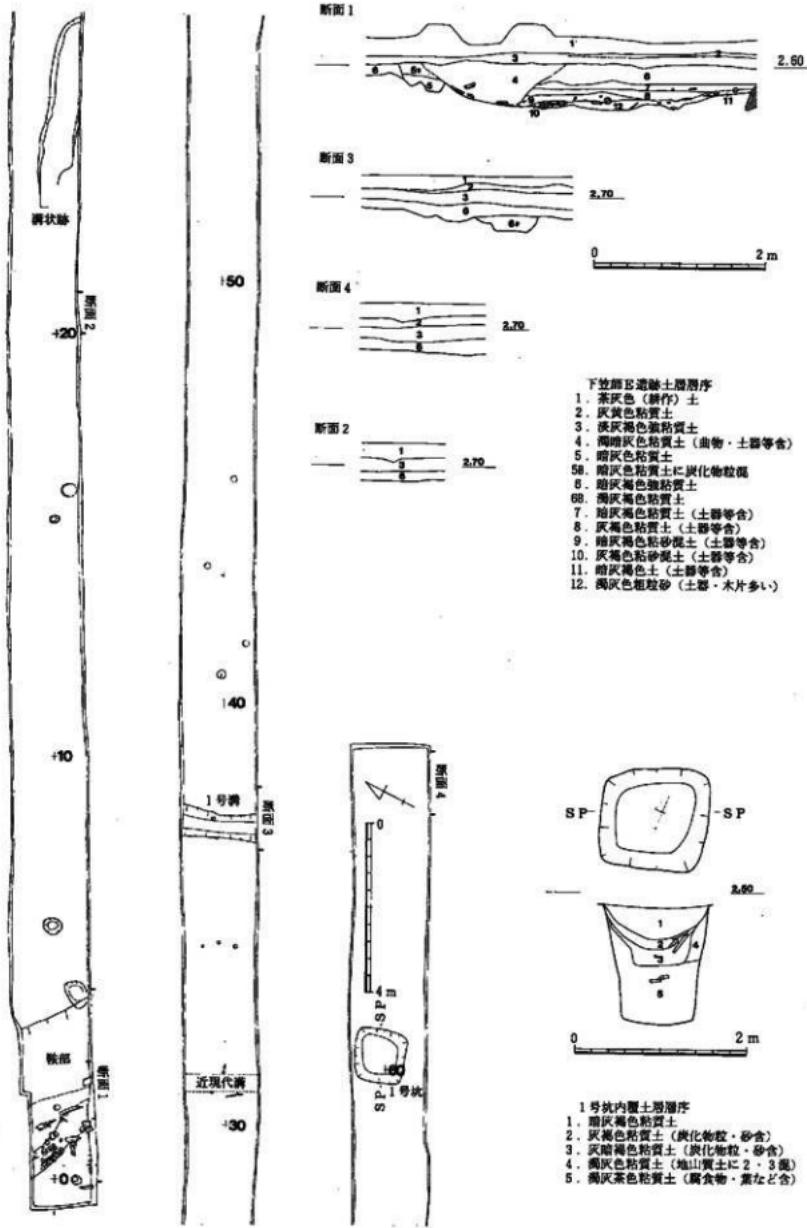
第6図 下笠師スノブ遺跡1・2区実測図



第7図 下笠師スノブ遺跡3区実測図



第8図 下笠師スノブ遺跡4・5・6区他実測図



第9図 下笠師E遺跡発掘実測図

発掘区画は幅約1.9m×延長約64mのトレンチ一条で、検出できた遺構では西部端に落ち込みがあり、これを鞍部としているが傾斜部とその埋積跡の後出溝の複合又は、古溝と後出溝の複合によったもの、それに近接した東側に小ピット、0号より20m強で東西の溝状跡、中央部付近に南北方向の1号溝、東端部に井戸状の1号坑であるが総体的に濃密ではない。上記した遺構中、小ピットを除いては全てなにかしらの遺物の内包があり、包含層中として取り上げたものは全体的に点々と散らばりをもつていて、集中的なものはない。

第2節 遺構と遺物

確実に遺構を検出できたのはE地点（遺跡）調査区内においてであるので、以下はE遺跡の遺構・遺物についての説明である。

輪 部（第9図、第11・12図）

当初、自然地形の落ち込みかと考えていたが、下部への発掘に従い壁面観察で後出の溝を含んでいたことが判った。遺存した上面幅で約1.4mで深さ0.45mになるが西側の壁体をとぼしてしまっている（上部溝）。方位的にはN-42°-Wに流路軸線があり、北西方から南東方に向かった上代の農業用水路的なものではなかろうか。

出土遺物の取り上げは、当初、下部の溝ないし凹地部分と一体的なものと考えていたこと、上部溝覆土（第9回断面1参照）とする4層と下部の6層が上面で綾別できなかったこともあって、一括的に鞍部扱いしてきたため不分明なものとなっている。ただ、大まかには下部にあたる6層には砂岩の碎けた粗い塊が多く含まれて上層を内包していなかったと記憶しているが、上部溝の西側壁部と下部との接点では多分に混同があるものと思う。

下部溝かの状況は、7層暗灰褐色粘質土以下自然木も含めて棒状の丸めの木が目立って含まれていて、最下底には荒めの砂と帶状に土師器甕片群などが遺存していて、流路であったと推測される。

遺物（第11～12図）1・2とも内面黒色の碗形土器でどちらも細かな砂粒を多く含んでいる。3～5・7・8はゆるやかに円みをとて外反する菱形土器で、外面タテハケ、外面はヨコハケやナデのものがある。胎中に細かな砂粒が多く含まれていることと海綿骨片が含まれている。6・9～12は、輪積痕のこる粗い調整のカヌ又はハチ状の土器で、砂粒および海綿骨片の含まれ様は菱形土器と同じである。13～16は尖底の製塙土器で、他の土器と胎質が似通っている。いずれも外面にはぶい黄橙色をなしている。なお、5と8の内面にはススの付着があり、8では体内部上端の約2cm程が特に厚い付着である。

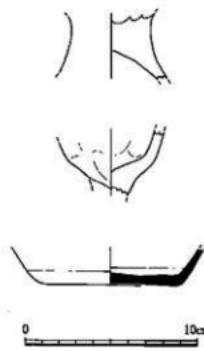
17～21は須恵器でいずれも胎中に細かな砂粒を多く含んでいる。

22は珠洲ツボ体部片で細かな平行タキ目で、外面緑灰色で内面青灰色。23は皿であろうか、内外面とも灰黄褐色をして焼成堅く、削り出し高台である。

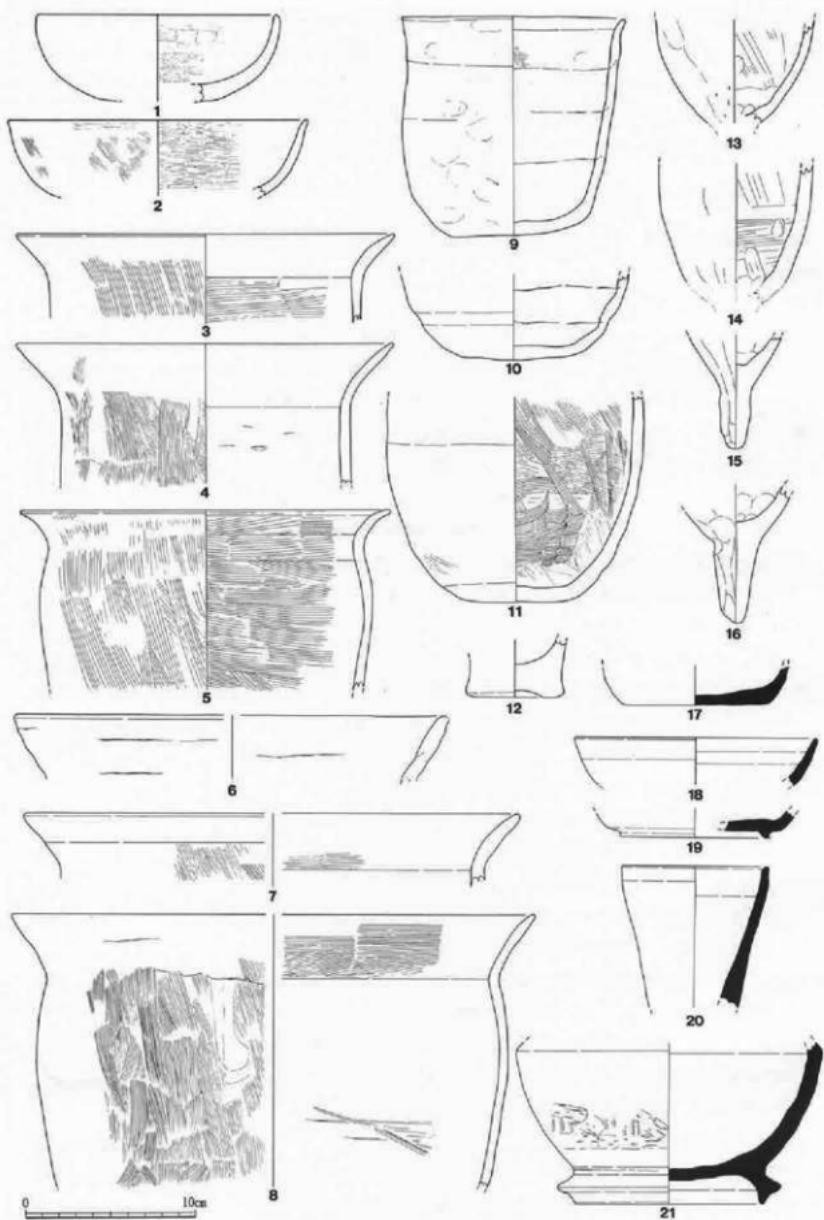
どこの製品か不詳。24は底径11.6cm、底部厚2.4cmの台状高台の大振りの木製桷又は小鉢であろうか。肉眼では白木で内面は円滑性もあるがクロ挽きかは判らない。外面に削り痕の稜線もみられ途中品であるかもしれない。25は曲物片で土厚で板状になって出土。26～28は円形曲物板で径約15～14cm、厚0.55～1cmの3点。なお、28にはこげた跡がある。29は取手状のものがある断木で不明。30は破断部にクギ跡様の2小穿孔のある幅約2.6cm、厚約1.3cmで長軸端が円く削られている。31は幅約6.3cm、厚約1cm、現存長60.7cmの板である。

溝状跡（第9図、第10図）

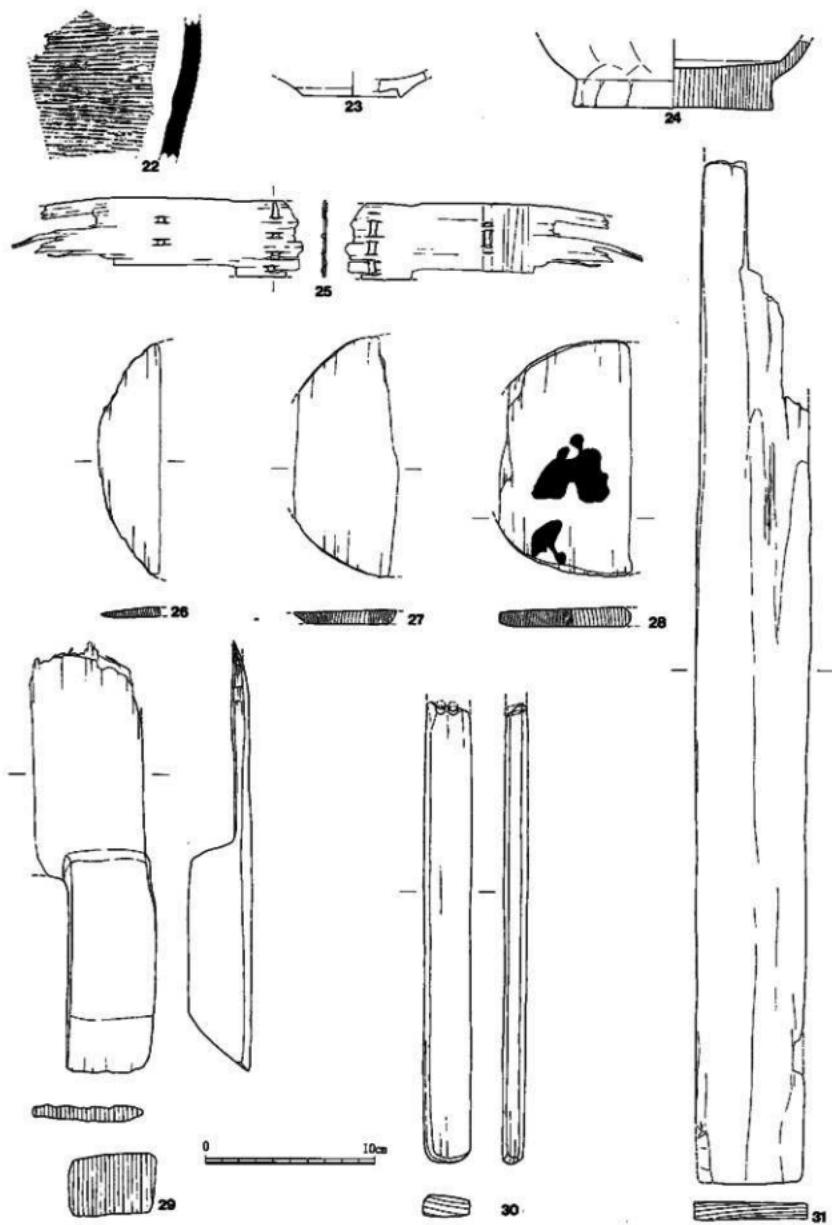
東西方向に長い不詳な溝状のもので、薄い黒褐色の内充土があった。検出面から底まで約5cm前後と浅く、弥生後期の高环片と製塙土器片、須恵器片が出土。須恵器の底径は約8cmでやや薄手の製品である。



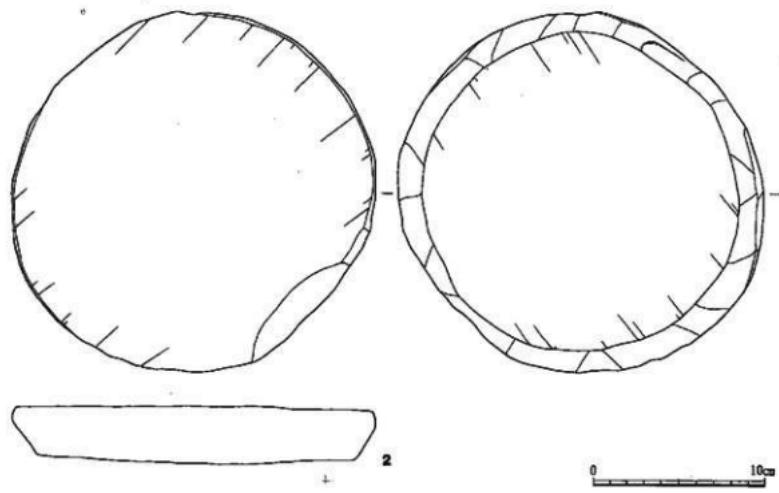
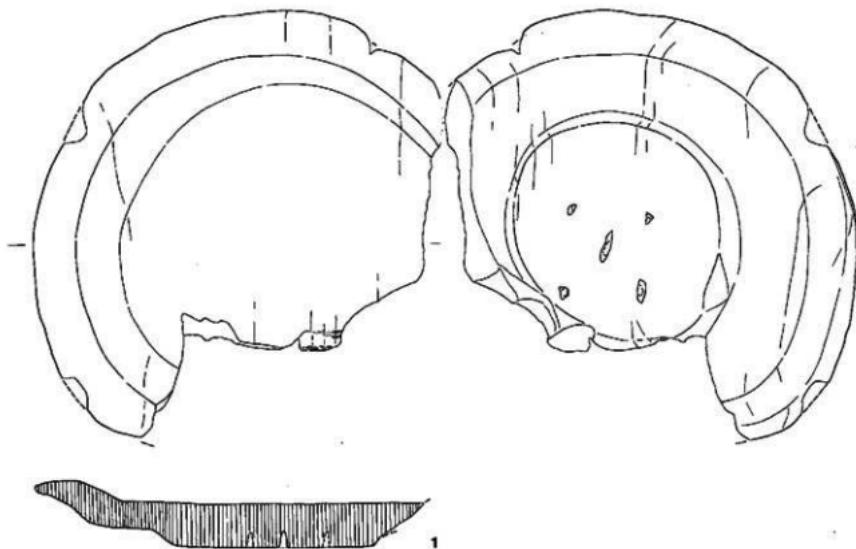
第10図 溝状跡出土遺物



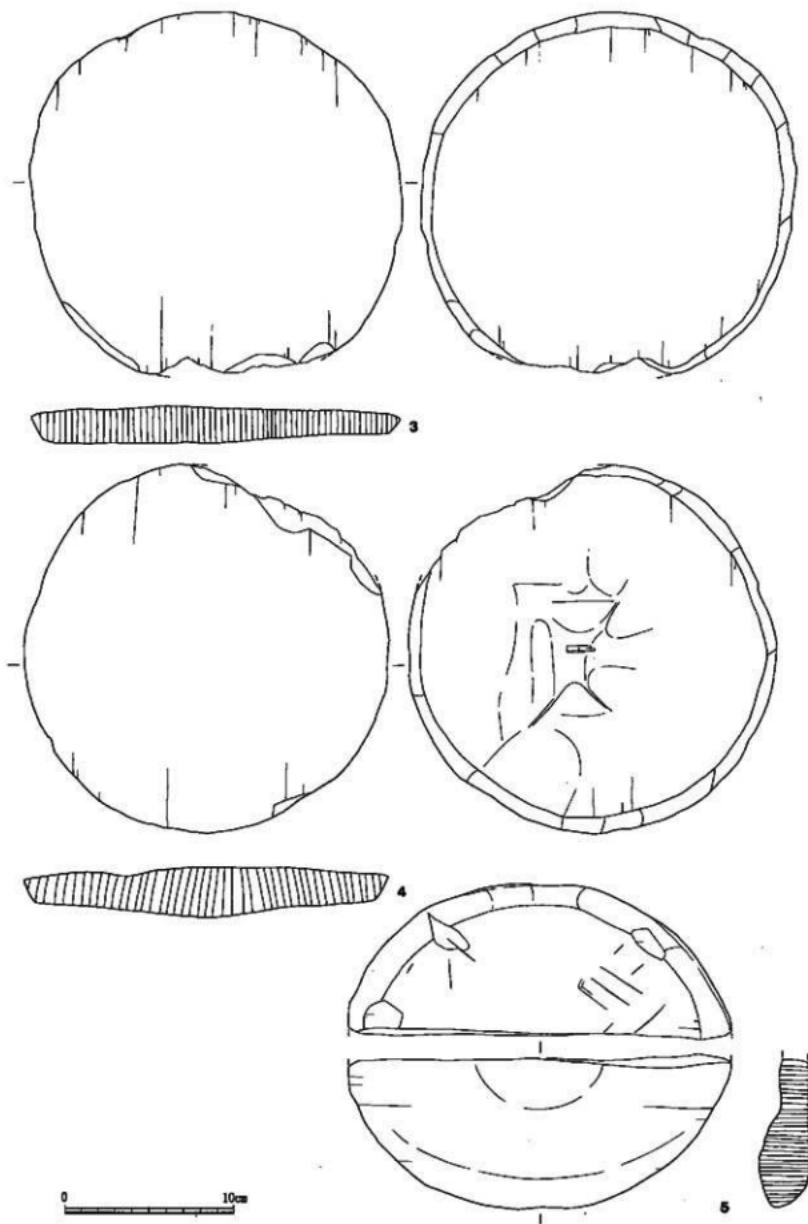
第11図 下笠師E遺跡鞍部溝状跡出土遺物（その1）



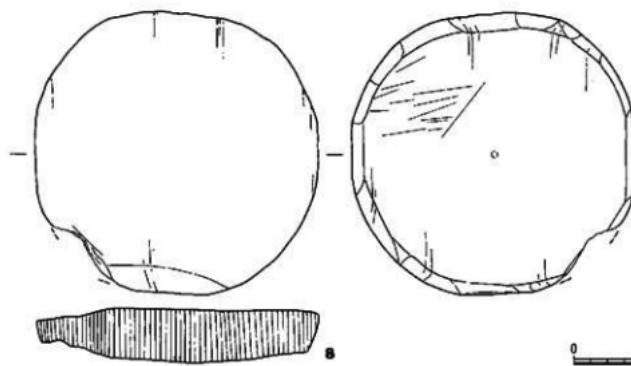
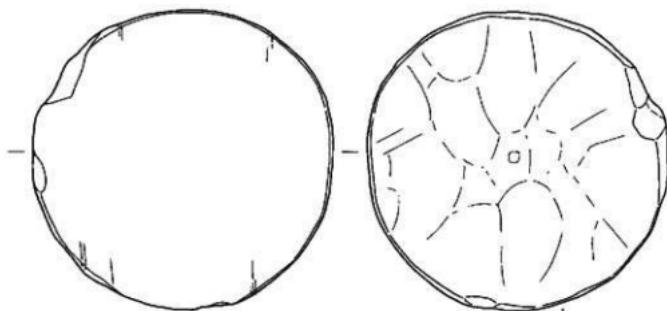
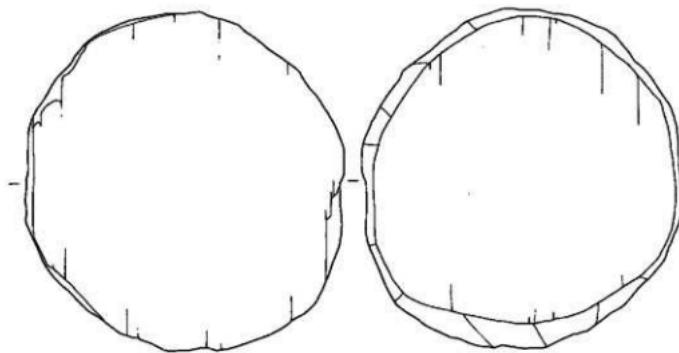
第12図 下笠跡 E 遺跡鞍部溝状跡出土遺物（その2）



第13図 下笠師E遺跡1号坑内出土遺物（その1）

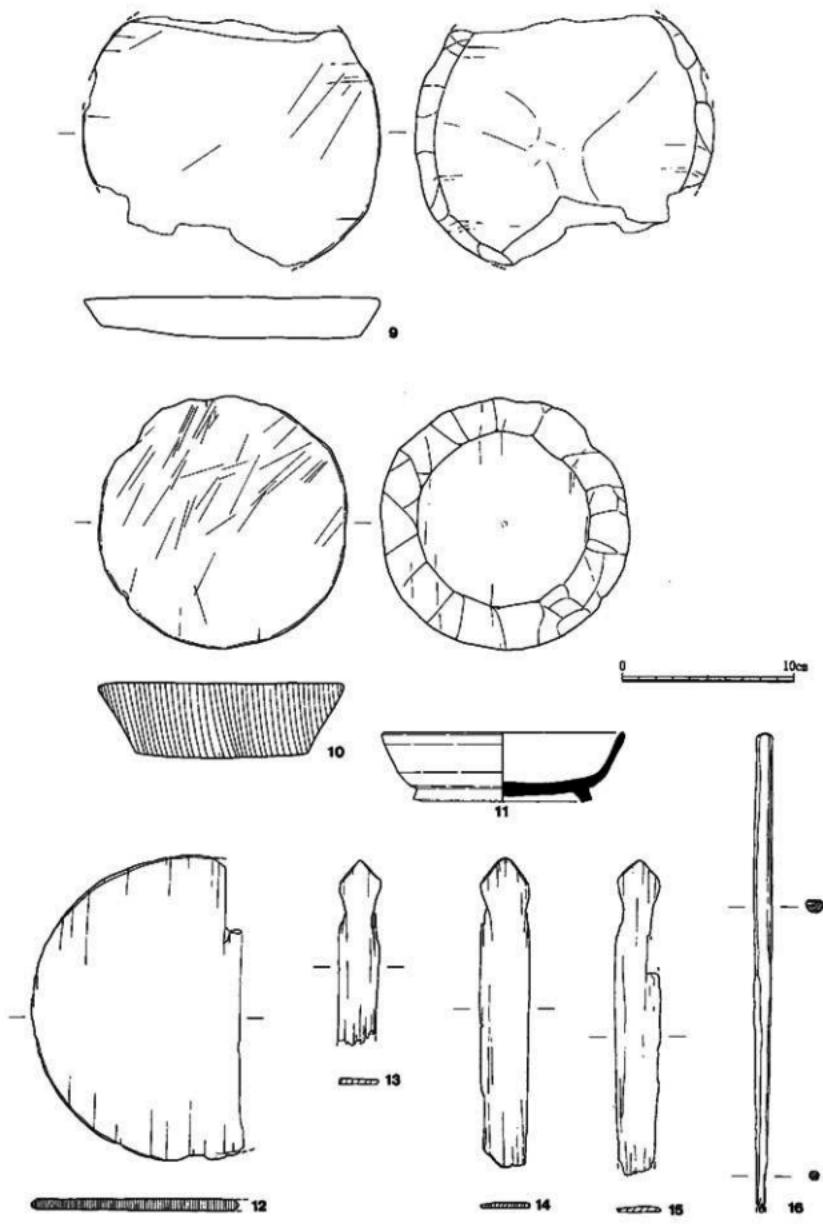


第14図 下笠跡E遺跡1号坑内出土遺物（その2）

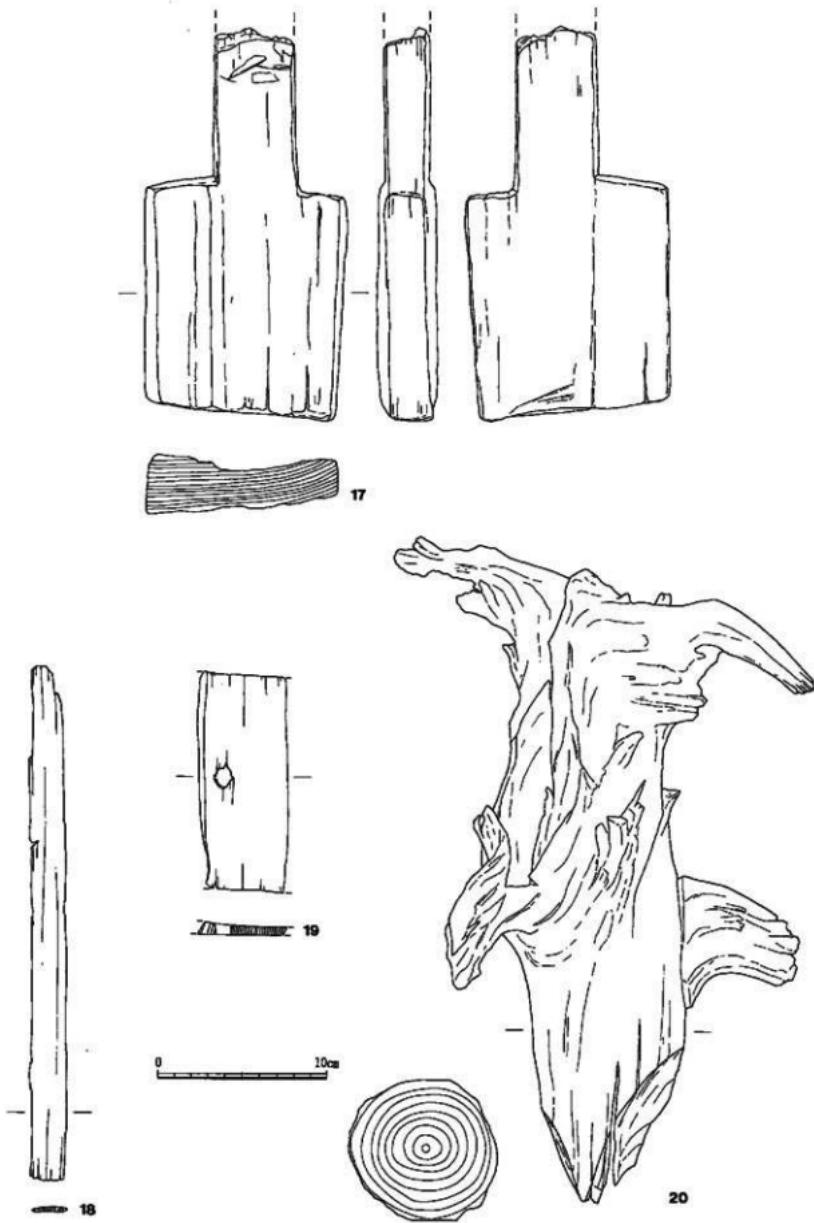


0 10cm

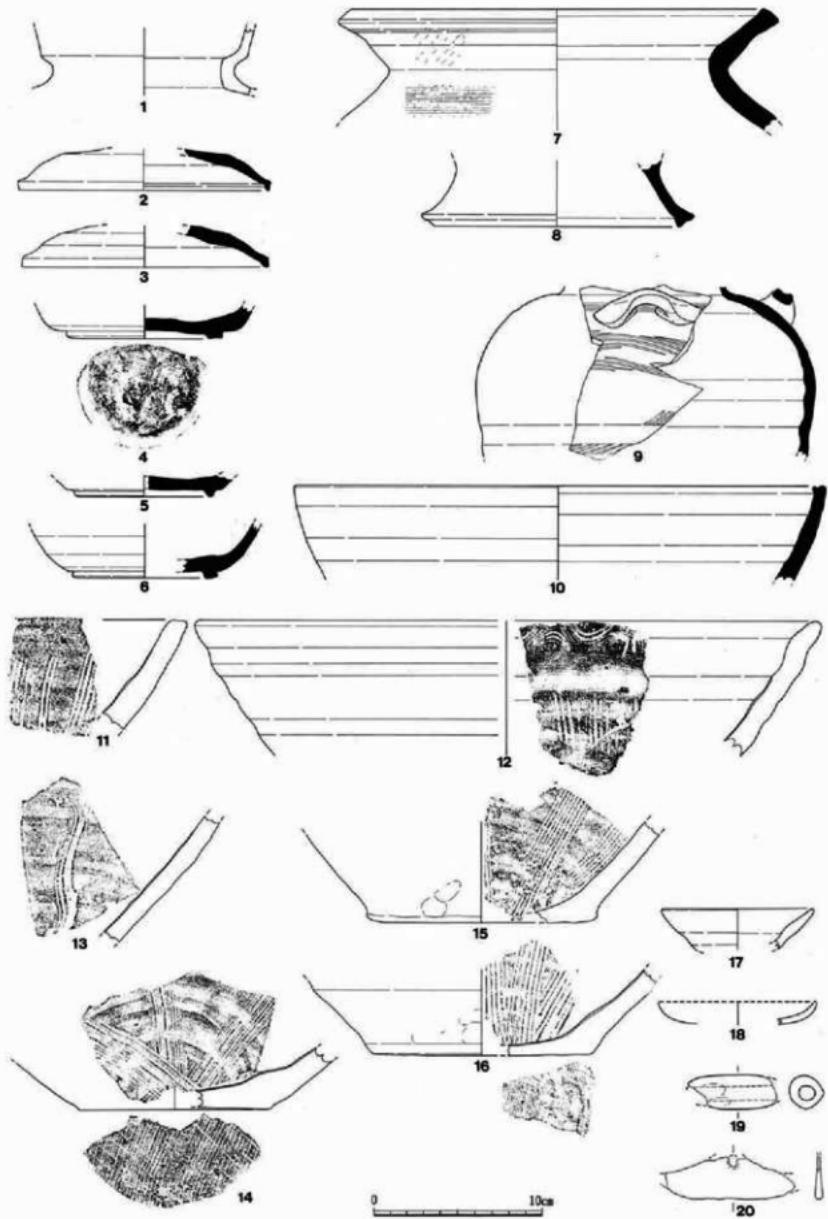
第15図 下笠師E遺跡1号坑内出土遺物（その3）



第16図 下笠師E遺跡1号坑内出土遺物（その4）



第17図 下笠師E遺跡1号坑内出土遺物（その5）



第18図 下笠跡E遺跡包含層中出土遺物

1号溝（第9図、第19図）

南北に向く、上面最大幅約38cm・底面幅約18cm・深さ約19cmの溝で、内覆土は褐色粘質土である。溝底より約3cm程ういて薄く黒色漆を施した木器の、皿であろうかが出土した。底径約9cm・器肉約0.35cmのうす手品である。

1号坑（第9図、第13図～17図）

東西方128cm×南北方120cmの平面形がやや菱形的な方形坑で、深さ約140cm。井戸様の土坑であるが、若干の浸透水はあったが湧水することはない。内覆土は上部の第1～第3層までが沈下湾曲して皿様に埋まっていて、その下は底までの厚い埋土（第5層）となっている。第5層褐色粘質土には木の葉や木の削り屑と思われるものの他、腐蝕物も多く含まれて、総体的にやや中央部に偏在的であった。この第5層は細分される可能性をもつてはいたが、坑内は狭く暗くよく判らなかったのが実状である。

この坑内よりの出土遺物は第2・第3層と第5層上半部より出土しているが、両層にまたがるものや、土層の自然堆積というよりは、後に下部に埋まった腐蝕物などにより上部理土央部の沈下と考えられる一時的埋積によつた一括性のある遺物と考える。第13図～第17図までがこより出土したものである。

第13図1は、径28cmに復元できる木製盤ないし皿形の、加工が進んでいる荒型であるが、仕上げ段階に近いのであるか否かは不明である。径約11.5cmの台状底部が形成され、口縁部分は断面鳥頭脚ように延びる特徴的なものである。外底面部にはロクロ爪痕が残っている。木取りは厚4cm強に、広葉樹の横木取りである。第13図2～第16図9は円板状に整形された荒型で、いずれも台形状に底面側を一回り小さくとっている。法量を最大で示すが、2は径21.8cm・厚3.4cm、3は径21.9cm・厚2.2cm、4は径21.8cm・厚3cm、5は径22.5cm・厚2.4cm、6は径19.9cm・厚3.4cm、7は径17.7cm・厚3.7cm、8は径16.8cm・厚3.2cm、9は径17.5cm・厚2.2cmであり、大きさは3法量に分かれてくるようである。仮にこれを大中小の三種に分けると、大は28cmの1・中は19.9cm～21.9cmの2～5・小は16.8cm～17.7cmの7～9となるが、6は中と小の中間値にある。6をよく計測してみると、椭円形状をなして最長幅で19.9cmであるが短軸幅で18.7cmしかなく、これを採れば小の領域に近接するのでここに含めてもよさそうに想う。

10は、純用と想われる荒型で、上面径15.0cm・底面径10cm・厚4.5cmである。11は須恵器で、口径14.2cm・高台径10.5cm・器高4.1cmで粗めの砂粒が目立つが良品である。12は円形の曲物底板と思われる径18.2cm・厚0.7cmのもの。13～15は斎串。16は木棒ないし箸状品で細まる先端部にやや欠損がある。現存長28.5cm。

17は、剥き取り材に切り込みで柄状のものをつくるが何であるか不明である。18・19は板で19の穴は枝節の抜け穴の可能性あり。両側が破断していて、縦幅は12.6cmである。20は、木の根の部分を逆さとして先端を尖らせている。

第3節まとめ

笠置地区における三地点遺跡の調査は、笠置川との係わりのなかで日々と生成されてきた当地区的様相を垣間見させてくれるものがあった。海浜側に最も近いF地区（遺跡）では、現在の地表下約1m（標高0.6m）が、いつの頃までかを証明することはできないが、繩文時代あるいは弥生時代などの比較的近い過去では海中であり、入江状となっていたことは貝類の生息砂層の存在で疑いを得ない。その後土砂の堆積が続き、7世紀代とみられる製塙土器片がこの沖積部で採取されることとなり、この近辺で製塙を行う人々の生産場あるいは住居跡があつたと考えられる。また、その後中世に至っても、陶器片が多量ではないが確実に分布しており、近接した空間に集落あるいは館などの存在が予想できる。今回の調査区が緑的なものであるため、その主体的な遺跡部分から外れていたものか、あるいは現集落と同様に山裾に居があって全面の沖積部を水田としているためかとも考えられるが、どちらかといえば後者のあり方のようにも想える。



第19図 1号溝内出土漆器

こうした様相は、次のスノープ地点（遺跡）でも似かようものがあり、現集落側に近いトレンチには基盤土的なしっかりとした黄色系土の堆積と、その上の層で中世陶器を若干含む包含層とされる層序があり、沖積部の中央側に向かうに従い不安定な地層が下部を占めており、やはり山裾あたりに主体がありそうに想える。なお、この付近の標高は2.6～2.7m代で、下部の状況を確認していないがここまでF地点にみられた海は入り込んでないと思われる。

E地点（遺跡）では、遺構の数は多くはなかったが、今後にのこされる課題の多い遺構が発見されたともいえそうである。西端の鞍部（溝の複合）では、掘り下るに従って調査区内に浸透する水の溜り場ともなっていて正統に掘れなかったが、断面観察では上面部分の切り込みライン部分が周辺と色調・土質が混ざって不明確とはいえ、調査区東側部分の包含層とした層より上位での切り込みであり、あるいは上部溝は中世後期の溝となる可能性が強いように思われる。あるとすれば、7世紀後期より下部が埋まり始め、12世紀代に平坦地化していくことになる。また、包含層中出土（第18図）12の珠州すり鉢はI区（この付近）上層の粘質土中として取り上げられており、上層粘質土は第3層に相当（第9図）しているので、上部溝は15世紀代には埋没している可能性をもつ。

1号坑では円盤形の荒型の他、ロクロ挽きが加わる盤様のもの・簀串・その他の、特殊的な遺物を内包している。併出した須恵器高台付环がこれらの年代を指し示す有用な資料といえるが、能登における須恵器編年研究は途上にあって、それぞれ微妙に意見が異なるが8世紀後半代とすることには大過なさそうであるが、中葉にちかい後半か後葉にちかい後半かは重要な意味をもつが、今後の研究を持つしかない。

荒型は当然、漆器製作が背景にある原本の伐採・分割・荒型造りなどの段階までの中途品であり、以後の工程に引き継がれて通常、ほとんど残らない性質のものであるが、どういう経営あるいは管理主体がどういう工人等集団を組織して、ここで何のためにこの遺構を掘り遺物を埋めたのかという課題とまた、製作の工程・技術を考えるうえでも重要な遺物ともいえる。

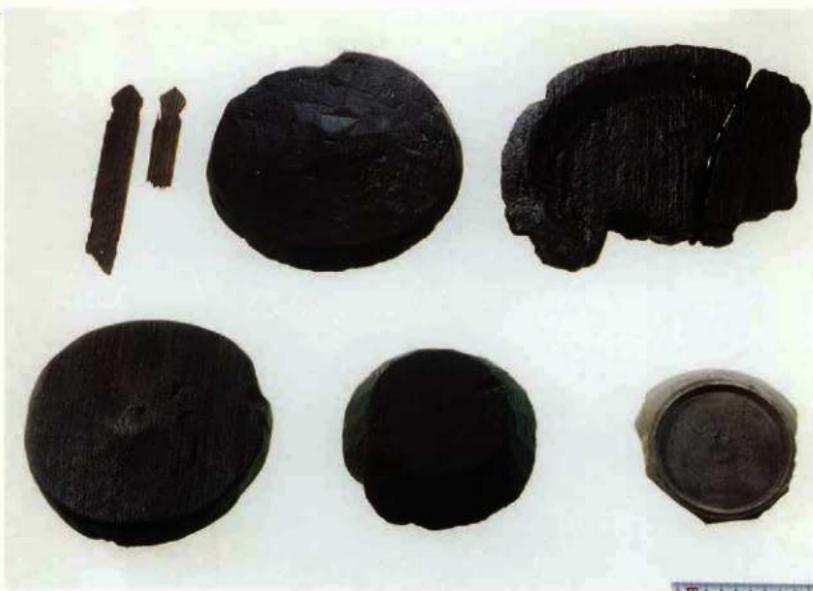
写 真 図 版



調査区全景（西方より）



調査区全景（東方より）



1号坑内出土遺物（一部）



調査区西端鞍部・溝状跡（西方より）



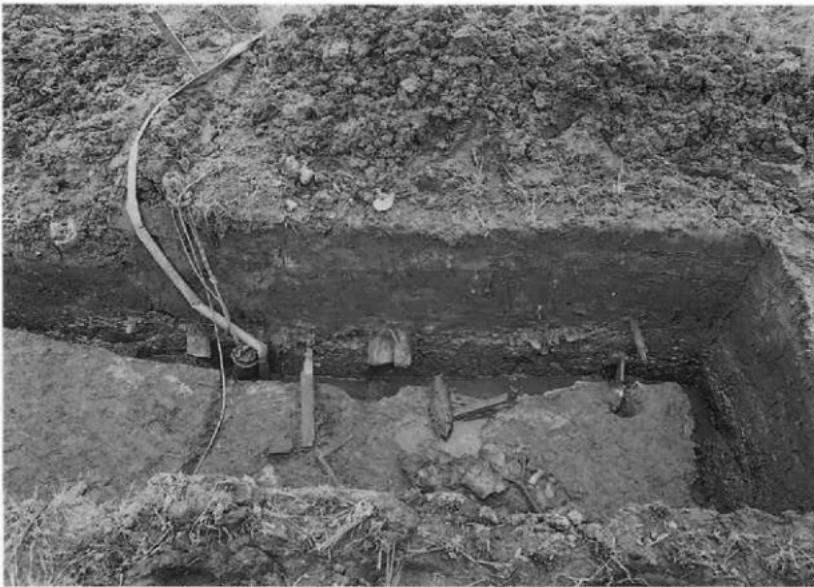
遺跡地近景（東南方より）



表土除去作業



発掘作業風景



調査区西端鞍部・溝状跡（北方より）



西端鞍部・溝跡遺物出土状況（東方より）



1号溝跡（北方より）



1号土坑発掘作業（北西方より）



1号土坑内土層と遺物（南東方より）



1号土坑発掘作業風景（東南方より）



1号土坑完掘状況（北方より）



遺跡地近景（南東方より 主に1・2区）



1区発掘作業風景（西方より）



1区完掘状況（東方より）



2区完掘状況（北方より）



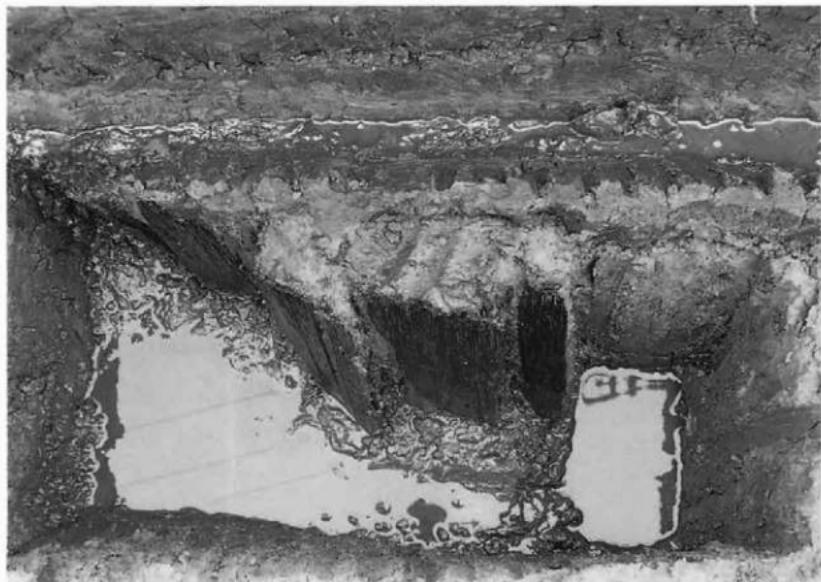
3区発掘状況（南方より）



3区発掘状況（北方より）



3区調査作業風景



3区板状杭部分断ち割り（西方より）



4区発掘作業風景（東方より）



4区完掘状況（西方より）



5区発操作業風景（南方より）



5区発掘状況（南方より）



6区発掘作業風景（東方より）



6区完掘状況（西方より）



7区発掘作業風景（西方より）



7区完掘状況（西方より）



8区と南側集落風景（北方より）



8区表土除去作業（北方より）



調査地と景観（北方の丘陵より）



4区より5区方向を望む（北方より）



1区完掘状況（南方より）



2区完掘状況（西方より）



3 区完掘状況（北方より）



5 区完掘状況（北方より）



5 区完掘状況（南方より）



6 区完掘状況（東方より）

下笠師遺跡群

県営は楊整備事業中島地区笠師工区
埋 藏 文 化 財 発 振 報 告 書

平成9年 3月28日 印刷
平成9年 3月28日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921 電話(0762) 43-7692番代

印 刷 能登印刷株式会社